

学位論文題名

金文研究を通じた中國の歴史・思想・經書解釋に對する 研究の試み

学位論文内容の要旨

第一部(考察篇)、第一章「西周金文に見える「卿事寮」に関する再検討」は、西周金文に現われる「卿事寮」という組織の実態を明らかにしようとしたもの。当時の周の領域は内服と外服とから成り立っており、宗周鎬京と成周洛邑を中心とした東西に細長い地域が王畿であり、周王の統治の直接及ぶ範囲であって、この王畿の中が内服である。これに対し、王畿の外側の、周王の統治が直接及ばない地域が外服である。西周初期の器である令彝の銘文、『書経』酒誥・洛誥の文とを対照させると、令彝の「諸尹」・「里君」はそれぞれ酒誥の「庶尹」・「里居」に当たり、「百工」は洛誥の「百工」に当たると考えられ、「諸侯の侯・田・男」は酒誥の「侯・甸・男・衛・邦伯」の「侯・甸・男」に当たると考えられる。令彝の銘文を見ると、「卿事寮」・「諸尹」・「里君」・「百工」でひとまとまり、「諸侯の侯・田・男」でまたひとまとまりと考えられるから、前者が酒誥にいう内服に、後者が外服に当たる。このことから、「卿事寮」とは内服に関係をもつ組織であることがわかる。また、「卿事寮」の語は、「卿事」と「寮」の二語に分けられる。「卿事」は、『礼記』緇衣に見える「卿士」の語を郭店楚簡『緇衣』では「卿事」に作っていることなどから、金文の「卿事」も先秦文献の「卿士」に当たることがわかる。「寮」は、『左伝』文公七年に「同官を寮と爲す」とあることなどによれば、同僚の意である。また、『左伝』隱公三年「鄭の武公・莊公、平王の卿士と爲る」に対する杜預の注「卿士は、王の卿の執政者。父子、周の政を乗るを言ふ」によると、王を補佐する執政であることがわかる。すなわち、「卿事寮」とは王を補佐する執政者の同僚・集団である。この「卿士」に関する記事を『左伝』及び『国語』の中から拾い出すと、鄭・虢・單・榮の各諸侯が「卿士」の地位についてことが記されている。この四者は、王畿の内側、すなわち内服の地に拠点をもつ、内諸侯と呼ばれる者達であった。これを総合すると、「卿事寮」とは王を補佐する執政者たる内諸侯の集団ということになる。

第二章『孟子』萬章下篇に見える「集大成」について」は、『孟子』萬章下篇に見える「集大成」の解釈について、従来とは異なる解釈の可能性を考察したもの。萬章下篇の冒頭では、孟子がかつての聖人とされる伯夷・伊尹・柳下惠の長所を述べた後、「孔子を之れ集大成と謂ふ。集大成なる者は、金聲して玉之を振ふなり。金聲なる者は、條理を始むるなり。玉之を振ふなる者は、條理を終ふるなり。條理を始むとは、智の事なり。條理を終ふとは、聖の事なり」という。これまで多くは、「集大成」の句は朱子の注に従って「集めて大成す」と読み、孔子を伯夷・伊尹・柳下惠の三人と比較した上で、孔子は三人のもつ聖徳を全て兼ね備えていることをいうと解釈されてきた。しかしながら、朱子の解釈に従うと、伯夷・伊尹・柳下惠の三人は「條理を始」めること(智の事)はできないのに、「條理を終」えること(聖の事)はできなるという矛盾に陥ることになる。そこで、この句は孔子を三人と比較しているのではなく、専ら孔子一人について述べたものであるとする中井履軒の説に従い、さらに「集」字についても、これまでのように「あつむ」と

読むのではなく、先秦文献、金文（毛公鼎）及び出土資料の用例を用いて「なす」と読み、「集大成」は「大成を^な集す」と読むべきであり、「孔子を之れ大成を集すと謂ふ」とは、孔子が大成を成し遂げた偉大な人物であることをいうという解釈を提示した。

第三章「馬瑞辰『毛詩伝箋通釈』における金文資料活用法の問題点」は、清朝を代表する考証学者である馬瑞辰による『詩経』の注釈書『毛詩伝箋通釈』における金文資料の活用法の問題点を明らかにしたもの。『毛詩伝箋通釈』の中では、『詩経』の字句を解釈するに当たり、伝世文献のほかに多くの金文資料が活用されている。しかし、調べてみると、これらの金文資料の活用の仕方には多くの問題点が含まれている。まず第一に、他の文献に引かれている金文資料をそのまま孫引きし、その際に金文の原文を確かめて裏をとるということをせず、他人の釈文にそのまま頼っているという点。第二に、孫引きではなく一次資料から引用してはいるものの、やはり釈文のみに頼って原文を確かめていないという点。第三に、典拠とする文献に示す器名と異なる器名を示すことがあるという点である。三つの場合いずれについても共通して言えることは、金文資料を引く際に釈文に頼り、原文を確かめていないという点である。極端な見方をすれば、馬瑞辰は古文字そのものにはあまり詳しくはなかったのではないかと印象を受ける。その結果、典拠とした文献に示された釈文に問題がない場合には、馬瑞辰の指摘は非常に優れたものとなるが、釈文が完全に誤っている場合には、これを用いた馬瑞辰の指摘・解釈も誤ったものになってしまう。また、当時知られていなかったはずの金文資料を用いればよりの確な指摘ができたであろうにもかかわらず、その金文を活用し切れていないために、かえって誤った結論に達している箇所もある。総じて、馬瑞辰は『詩経』に注するに当たり金文資料を積極的に用いて字句の意味をより正確に解釈しようとする姿勢はうかがえるが、金文及び古文字そのものに対する知識不足に起因すると思われる誤りも目立つという問題があることを明らかにした。

第二部（考釈篇）では、本論文を執筆するに当たって特に中心的な資料となる青銅器、すなわち令彝・番匋生壺・番生殷・毛公鼎の銘文に対する詳細な考釈を掲げている。

令彝の銘文は、「明保」なる人物が王によって成周（洛陽）における政治の全般を取り仕切れることを命ぜられ、「作册令」なる人物が「明保」を補佐し、それによって恩賞を与えられたことを記す。番匋生壺の銘文は、「番匋生」なる人物が、自身の娘のために青銅器を作って贈ったことを記す。番生殷の銘文は、「番生」なる人物が、自身の祖先をたたえる文句を述べた後、王によって政治全般を総攬するよう命ぜられたことを記す。毛公鼎の銘文は、王が周王朝の開祖である文王・武王をたたえたのに続き、王室が危機的状況にあることを繰り返し述べ、「毛公」なる人物に対して政治の全般を総攬して王を助けるよう命ずるという内容を、五百字に及ぶ長文の銘文によって述べる。

以上の考釈は、中国の郭沫若・楊樹達・陳夢家・唐蘭・馬承源など、日本の貝塚茂樹・林巳奈夫・伊藤道治・白川静・松丸道雄などの多くの優れた研究者の成果を博搜し、つき合わせて、妥当な解釈を確定したもので、この金文資料の解釈が、第一部の各考察の立論の根拠となっている。

学位論文審査の要旨

主 査 准教授 近 藤 浩 之
副 査 教 授 佐 藤 鍊太郎
准教授 吉 開 将 人

学 位 論 文 題 名

金文研究を通した中國の歴史・思想・經書解釋に對する 研究の試み

西周時代の政治・社会について知るために必須の一次資料である西周金文の利用価値は、そののみにとどまらず、銘文の語句・表現は、消滅することなくその後の先秦文献に受け継がれ、『詩經』・『書經』をはじめとする春秋戦国時代の文献には、金文の知識を用いて解釈することが可能な語句がある。清朝では經書の語句の意味をより正確に把握するために金文資料が有効に活用できることが認識され、乾嘉期から考証学者達によって本格的に利用されるようになる。清末には甲骨文字が発見され 1928 年には安陽の殷墟発掘が開始され、その解読と研究が急速に進むのと相俟って、金文の研究も盛んになり日本でも多くの優れた研究者が研究に従事し、その成果の蓄積は 1980 年代までに期を画すような到達点に達した。しかしその後、日本における金文研究は低調となり、先学の蓄積した遺産を活かして新たな段階へ研究を発展させることがあまりできていないのが現状である。

本論文は、このような観点から、先学の金文研究の成果を集注的あるいは訓詁学的に整理して、改めて青銅器銘文の考釈を作り、それに基づいて西周時代の政治に対する考察、先秦の思想文献に見える語句の解釈に対する考察、清朝の考証学者達による金文資料活用方法の問題点に関する考察を試みたものである。

第一部（考察編）は、すでに学会誌（『中国哲学』第 34 号・第 38 号・第 39 号）で発表された三つの論文をまとめたものである。第二部（考釈編）は、令彝・番匋生壺・番生戣・毛公鼎の銘文に対する詳細な考釈で、中国と日本の多くの優れた研究者の成果を博搜し、つき合わせて、妥当な解釈を確定したもので、この金文資料の解釈が第一部の各考察の立論の根拠となっている。

第一部、第一章「西周金文に見える「卿事寮」に関する再検討」では、概して意味を確定し難い金文資料にあって、「卿事寮」の意味、その構成員の地位・範囲や役割をほぼ十全に明確にした点は高く評価できる。また、先学の考証の成果を、後学が理解し比較検討し総合して妥当な結論を導き出すこの手法は、青銅器銘文研究の本筋とも言える研究方法で、今後この方向での研究の進展が期待される。

第二章「『孟子』萬章下篇に見える「集大成」について」では、論証に使った青銅器銘文が毛公鼎のみでしかも傍証の一つにとどまっている点と、「集」を「あつむ」ではなく「なす」と訓ずることによる『孟子』解釈学上の利点があり示せていない点とが難点ではあるが、「集大成」のような『孟子』の言語の一部には、『詩經』『書經』そして西周金文の言語状況が反映されている可能性が高いことを指摘できた所に、この章の学術的な価値がある。戦国時代の『論語』『孟子』『墨子』などに春秋時代の『詩經』『書經』がよく

引用されることを考慮すれば、関連する西周金文の言語状況が部分的に『孟子』などに現われて文章を難解にしている場合の解釈方法として一例を示したことになる。

第三章「馬瑞辰『毛詩伝箋通釈』における金文資料活用法の問題点」では、青銅器銘文に対する知識や理解度に関して、中国古典の読解において訓詁学や考証学の頂点を極めたとされる清朝考証学の問題点の重要な一端を指摘することに成功している。現代の金文研究の成果を清朝考証学の見直しに活かし、それを古典文献そのものの訓詁学的解釈学的な見直しへと繋げていくという、新しい研究の方向性を示唆できた点も高く評価できる。

第二部に掲げられた青銅器銘文の考釈は、研究者が最も心血を注ぎ、長い時間と研鑽を傾けた学術的財産の集積であるのに、一般に、学術雑誌などに掲載されて表に出るような機会はほとんど無いものであるが、金文ひいては中国古典文献を研究する者が、数十年後も百年後も参照するのは、このような地道で着実な考釈や訳注の類であり、本論文で最も学術的な価値が高いと言っても過言ではない。

以上のように、この分野の研究成果の集成と発展に寄与する本論文は、博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものである。